

# 随想 縄文人とイヌ

金子浩昌 (国立博物館客員研究員)

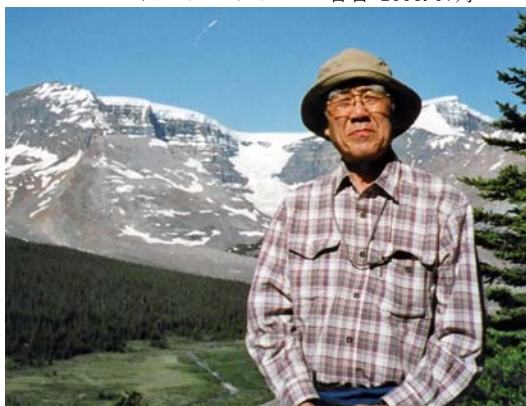
東京美術「貝塚の獣骨の知識・人と動物のかかわり」1984 の著者

私はこのところずっと、縄文人が犬とどのような関わりの中で生活してきたのか、を考えています。もちろん、縄文人と犬についてはこれまでに触れる機会がありました。例えば、縄文犬のことについて述べ『イヌとヒトとはよき友人』(アニマ1983、No. 12 1)、『縄文人にいつくしまれたイヌーイセキから蘇る先史犬』(アニマ、1987、No. 172) など。その他にも縄文犬が話題になればほぼ同じ内容が述べられるでしょう。しかし、イヌという動物と人とのつながりをもっと根源に立ち戻って考える必要があるのではないかと考えています。

縄文時代に、イヌを飼うということ、イヌがみぢかにいるということは、ヒトの狩猟という行為に関わることであったと思いますが、ヒトの感覚を超えた自然の様々な状態を察知する能力をもっていて、ヒトに教え、ヒトもまた学んだのでしょ。それはイヌだけがもつ能力でした。それはまさに友人以上の仲間一家族の一員だったのです。みぢかにいるイヌとの日々は、心を尽くしての付き合いであったと思うのです。「人間と犬は心を通わせ合っている存在であることは間違いない」とマクローリンが書いています(イヌ、xi 頁)。おそらく自然に生き、狩猟に携わる全ての人と同じ考えを持っていたことと思うのです。それは新しい生命の誕生から、その成長を見すえ、やがて共に自然のなかに活動するなかで、いたわり合い、励まし合う仲間だったのでしょう。お互いがその一挙手一投足を見、感じ取っていたのでしょう。

イヌの埋葬はその端的な表れであったと思われま

カナディアンロッキー・トレッキングの著者・2006.07月



す。成犬、幼犬を問わず、骨折した老犬の例もあります。最近千葉県市原市西広(さいひろ)貝塚の発掘調査報告が刊行されましたが(市原市教委、『市原市西広貝塚II、2003』、市埋文調査センターの鶴岡英一氏が縄文時代後期に由来する埋葬犬7個体の詳細を記載しています。なおヒトの埋葬遺体17例も埋葬犬の近くで発掘されました。約4000年前[縄文時代後期初頭堀之内期])でした。

この埋葬犬のなかに♀成犬ですが、下顎にひどい歯周疾患(歯周炎)を患った個体がありました。肝心な奥歯(第一後臼歯)の歯根周辺の骨が吸収され、歯根がまるみえ状態です。これでは噛みつく力もなかったのではないかと想像されます。狩猟にはとて



①上、5号埋葬犬 右側下顎骨、臼歯の歯根がみえている。雌個体。

下、3号埋葬犬 右側下顎骨、臼歯の咬耗著しい雄個体。食べ物との関係が考えられる。縄文人の咬耗が現代人と比べて年齢のわりに進むのと同じ。



②3号埋葬犬

上顎骨の咬面、右側の犬歯、前臼歯の一部が失われている。急激な打撲で歯が欠損し、そのまま歯槽が閉じたものと思われる。狩り際の損傷と思われる。

も不向きではなかったろうか。それでも最後は埋葬されているので、このイヌは一家の家族のもので過ごし、それなりの役割があったのでしょう。

このような歯周疾患は当時ヒトにも少なからずあったようです。食性に共通するところがあったかも知れません。飼い犬の歯についても理解があったのでしょうか。私も同じような縄文犬の下顎骨例を千葉県松戸市貝の花貝塚で報告したことがあります(松戸市教委『貝の花貝塚』1973)。この例は♂イヌの遊離下顎骨で、第一後臼歯にも咬耗が進んでいました。がっしりとした体格だったと思いますから、狩猟に参加することもあったかも知れません。東北地方の花貝塚出土犬についても報告されています。

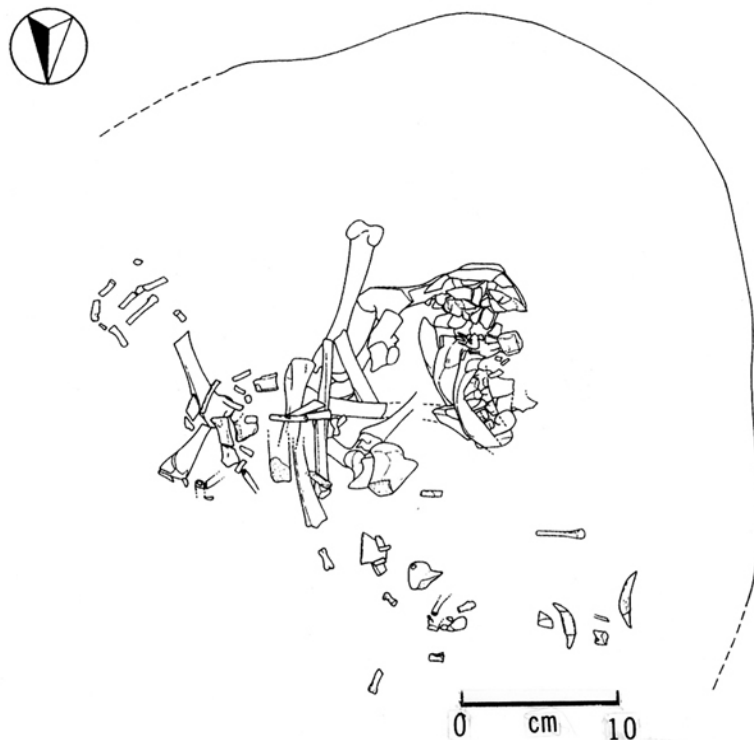
狩りの問題と埋葬の問題は次元の違うことのように思われますが、狩猟の問題を論ずるならば、イヌに対してどのような扱いがあったか、注目しなければならぬことでしょう。イヌは、「人間が使用する生きた道具としてつくられたもの」(マクローリン、142頁)というのやや抵抗のある表現ですが、道具

のことを第一に考える研究者に聞いてもらいたい言葉です。

考古学の研究者は、狩猟といえば、狩りの方法、陥し穴、罾猟には関心があっても、イヌのことについては殆ど記されないのが普通です。多くの愛犬家が縄文時代のイヌに深い関心を持っていると言うのに。

一方で、当時はイヌを食べる事が普通であったらしい、ということも考古学の入門書にも書かれたことがあります。イヌの骨格に切り傷の痕があることが証拠とされることがあります。そうした例は確かにありますが、まだ詳細を調べるには至っていないでしょう。北海道、礼文島に住んだ北方文化の人々の中にはそのような風習をもち、その証拠を遺しています。しかし、それと同じような遺骸の出土例を縄文遺跡にみることはできません。それにしても、縄文文化の研究者にとってはあまり関心のある問題ではないようです。愛犬と共に生活する読者とは違和感があるのではないかと思うのですが。

イヌの埋葬についてはすでに述べましたが、頭骨、



## 5号埋葬犬

### ③埋葬犬実測図。

5号犬はやや乱れています。3号犬は他のイヌと重なっているので掲載されていません。からだを丸く曲げた屈葬の姿勢であることがわかると思います。西に頭を向け、顔の向きは北向きです。もともと狭い穴のなかに入れるので、このような姿勢になるようです。

5号犬の下顎骨は全長10.4cm、体高37cm、3号犬は下顎骨全長12cm、体高40cmと推定されています。小形犬で、柴犬タイプです。

以上、①②③の資料については市原市埋蔵文化財センターの鶴岡英一氏にお世話になりました。

四肢骨が遊離したり破損して出土するのも普通にみることです。これがイヌを食べたあと棄てたものという見方もあります。しかし、遺骸が散らばるのはヒトの場合も同じで、先程述べた西広貝塚の15例のヒトの埋葬例中、全身の骨格のほぼ残っていたのは、3例でした。イヌについても同じことがいえるでしょう。これについても今後よく調べないといけない問題です。

弥生時代になると稲作文化とともにイヌを食べる習慣が入ってくるというの、にわかには納得し難いのですが、中近世遺跡から出土するイヌの遺骸には切痕が多く残され、解体痕もあり、イヌを食べていた証拠ともいわれます。そのイヌはすでに縄文犬の面影の無くなった中型あるいはそれ以上になるサイズのイヌです。縄文犬は早くに姿を消しつつあったのです。中近世のイヌの多くは、古代以降に輸入犬であったり、在来種との交雑の末裔であったようです。

ただこうしたイヌについての扱ひも、日常のなかでどのようなものであったか、イヌを食べたとして、どのような人が、どんな目的で食べていたのか、深く検証されているわけではありません。文献によると誰それがイヌを食べたとか、料理本にどのように出ているという記述がありますが、当時の食文化をひろく論ずるには至っていないと思うのです。また、考古学の実証性が生かされていないようにも思われ、調査する側にも責任があるのではないかと考えています。話が脇道にそれてしまいました。

わたしは縄文人とイヌとの関わりは、ただ飼ったり飼われたりする関係ではなく、この時代は、マクロリンのいう「人とイヌの本来の結び付きが純粋に存在していた時期、あるいはイヌとヒトとの社会的なつながりをもっていた時代」だと思います。「イヌと人は共生動物である」とは小森 厚氏の言葉ですが、その通りだと思います。お互いに共生する関係にあった縄文時代、人がイヌを身勝手に殺したり、食べた

りする事は考えにくいのではないかと思うのです。弥生時代以降もそうした生業にあった人々の間では、この関係がつづいたことでしょう。

話はかわりますが、オオカミについても会誌「柴犬」誌上の中村一恵氏の文を読みながら考えています。縄文時代人はオオカミを有能な狩猟者として認め、尊敬していたことが、多くの資料によって裏付けされると思っています。マクロリンも同じことを述べています(「イヌ」121頁・注2)。それは縄文人が狩猟者としての資質があったからです。それ以後、弥生時代もその気風がのこされていたと思いますが、古代以降、狩猟者社会は大きく変わります。オオカミ、イヌ、人の関わり方もまた変わっていきます。しかし、それは人によるそれぞれの生き物の存在を無視し、独善的な振る舞いの中から生じて行ったことです。オオカミとイヌの区別もなくなってしまいました。恐ろしいのはオオカミもイヌも一緒になったことです。オオカミは間もなく姿を消し、自然の荒廃がいたるところにみられるようになるのです。

マクロリンは書いています「オオカミの滅亡—もしそれが本当におおくとすれば、おそらくそのことはわれわれ自身の未来の姿を予言するものであろう。しかもそれは決して遠い将来の出来事ではないのである(イヌ、125頁)」。

丁度良く、柴犬研究会の有志の皆さんが田柄貝塚の家犬骨を見学されたとのこと、私もこの貝塚の発掘には参加し、イヌの遺骸の発掘もしました。もう随分と以前のことで。博物館に阿部 恵さんという学芸員の方がおられましたか?この貝塚の報告書の刊行に尽力された方ですが、縄文犬との比較は、四肢骨についても現在のイヌと比べてみると良いのです。山野を跋渉していた石器時代のイヌの様子が感じられると思うのです。「柴犬」次号のレポートが楽しみです。(2006.08.18)

## 文 献

☆J.C. マクロリン

「イヌ—どのようにして人間の友になったか—」1984・澤崎 坦訳・岩波書店

☆茂原信生、小野寺 寛

「田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について」宮城県文化財調査報告書第111集『田柄貝塚』1986

☆小森 厚

『どうぶつと動物園』34巻1号、(通番号384号)1982、1

☆西中川 駿他

「鹿児島島の縄文、弥生遺跡出土の自然遺物—特に動物遺体について」鹿児島県考古学33、1999.7

☆松井 章

「狩猟と家畜」『列島の古代史、ひと、もの、こと』p184、第2巻・暮らしと生業、岩波書店、2005.10